

ヴェーバー研究の現在（いま）を考える

—その問題設定と趣旨説明—

松 岡 雅 裕

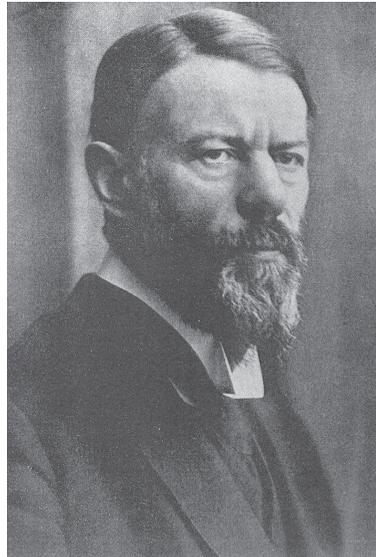
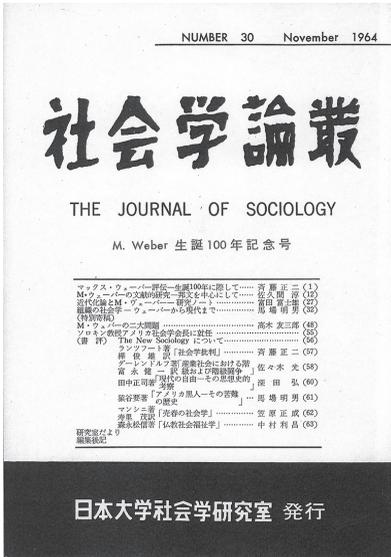
1. 問題設定

2015年度日本大学社会学会大会（7月11日開催・於日本大学文理学部）のテーマ部会では、久しぶりにM.ヴェーバーをとりあげました。かつて、本学会がヴェーバーを大々的にとりあげたのは、遡ること65年前、戦後間もない1950（昭和25）年のことでした。ちょうどヴェーバー逝去30年を迎えていたその年、本学会と日本大学法文学部哲学科、史学科、そして社会学科の共催という形で、当時神田三崎町にあった日本大学法文学部大講堂にて「マックス・ウェーバー逝去30年記念講演会」が開催されたのです。残された史料から当日の演題を見ると、大河内一男「人間に対するウェーバーとマルクス」、矢田俊隆「ウェーバーと歴史学の方法」、そして上原専緑「社会経済史研究家としてのマックス・ウェーバー研究のために」と、そうそうたるメンバーによる講演会であったことがうかがえます。司会は、史学科の石田幹之助教授と本学会会長（当時）・社会学科の馬場明男教授でした。講演会来場者には、手土産として「ウェーバー文献目録」が手渡されたとのこと。また、当日、会場には、古代オリエント文明の研究者としても名高い、昭和天皇の弟君に当られる三笠宮殿下もご来場されていたことが、後日馬場教授の述懐から明らかとなっています。おそらくお忍びだったのでしょう。来場者の芳名録にそのお名前が記帳されており、受付担当者に、「このような講演会が開催できる時代になって、本当に良かった。」と感想を述べられたそうです。

さらに、東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年には、本学会誌『社会学論叢』第30号で、「M.Weber生誕100年記念号」が発行されています（写真）。巻頭口絵にヴェーバーの肖像写真が掲載され、特集論文として斎藤正二「マックス・ウェーバー評伝—生誕100年に際して」、佐久間淳「M.ウェーバーの文献的研究—邦文を中心に」、富田富士雄

「近代化論とM.ヴェーバー—研究ノート」、馬場明男「組織の社会学—ウェーバーから現代まで」、さらに特別寄稿として高木友三郎「M.ウェーバーの二大問題」の5本が掲載されています。編集後記を見ると、「ただ残念なことにはS.アンドレスキイ教授の論文「ウェーバーの方法と理論」の翻訳が、その訳の許可をいただいたにも拘らず、ついに間に合わなかったため、これを次号に廻すこととなった。ご期待を乞う。」と馬場が書き記しているため、本来特集論文は6本という、かなり大部の号が予定されていたようです。いずれにせよ、本学会とヴェーバー研究との結びつきには、過去から並々ならぬものがありました。

今回、本学会大会で改めてヴェーバー研究を取り上げるのは、その後急速な勢いで蓄積されてきた現代社会学の知見に基づき、いま一度ヴェーバーの原点ともいべき古典に立ち還り、今日の社会学がそれをどのように読み解くかという学史・学説検証を行うためです。対象となる古典は、今なお論争的ともいべき古典中の古典、彼の『プロテスタンティズム



社会学論叢第30号「M.Weber生誕100年記念号」表紙(左)と巻頭に掲載されたヴェーバー肖像写真の口説

の倫理と資本主義の精神』(以下、倫理論文と略す。)です。

そもそも、この倫理論文は、雑誌『社会科学および社会政策アルヒーフ』(1904-1905)に2回に分けて掲載されました。しかし、1920年、その改訂版が『宗教社会学論集』に公表されるや、ヴェーバーの資本主義社会に対する評価・スタンスの解釈が混乱し始め、誤読(!?)ともいうべき事態が生じてきたという経緯があります。この点に関しては後述したいと思います。まず、この倫理論文が刊行された時代背景を敷衍しておきましょう。それは、1871年に成立したドイツ帝国の安定期、鉱工業や化学工業が成長した繁栄期であったことがうかがえます。つまり、ドイツに大衆社会状況が到来した時期であった点が重要です。この大衆社会状況下で、ヴェーバーが一体何を訴えようとしたのか、そこには、ヴェーバーの時代に対する肯定・否定といった価値判断が存在していたのではないかと。読み手のさまざまな解釈がまわりついでてきました。解釈次第では、倫理論文の趣旨そのものが大きく変更される恐れも生じてきます。今回のテーマ部会の重要な論点の一つです。

まず、現代に生きる私たちは、ヴェーバーのスタンスを評価する前に、いま一度古典の精読をもとに、彼が考察の対象とした宗教改革期の時代背景をどのように認識し分析したのかという出発点に立ち還る必要があるでしょう。当時は、ヨーロッパの経済的覇権国家が、スペインからイギリス・オランダといった北西ヨーロッパに移動するという、ヨーロッパ社会の地殻変動ともいえるべき大転換期でした。つまり、伝統的な秩序崩壊の感覚と不安感情がヨーロッパ社会に蔓延し始めていた時代といえるでしょう。人びとは、この不安な時代のなかでプロテスタンティズムに魂の救済を求めていました。ヴェーバーは、まさしく当時の人びとの心情を「理解(了解)する」という課題から研究を着手し始めたわけです。

2. 論争と意義

さて、資本主義の精神に関しては、ヴェーバーの同時代人W.ゾンバルトの存在を忘れてはなりません。彼は、1902年に上程した『近代資本主義』のなかで、既に資本主義の精神についてユニークな考察を明らかにしていました。ゾンバルトは、資本主義の精神には二つの系譜、ひとつは冒険・投機的な精神、いまひとつは慎重・計算的な精神があると述べています。ゾンバルトは、この後者にこそ近代資本主義の本流ともいえるべき精神

的起源を認めたわけですが、しかし、それはあくまでも「資本家の精神」のそれでした。

一方、ヴェーバーは、資本家のみならず、それを庶民レベルにまで掘り下げ、プロテスタンティズムの聖書解釈（ルター翻訳）を基礎に、世俗的職業労働が救済につながるという、聖職者のみならず「平信徒」にまで及ぼした影響を射程に入れ、彼らを資本主義的経営に駆り立てた動機と生活態度に着目したのです。ヴェーバーの視点は、いわば庶民・平信徒を含んだ大規模な文明世界の一大転換期ともいえるレベルに注がれていました。このように、キリスト教教義の新解釈を庶民たる平信徒たちがどのように解釈したか、つまり、信者の理解を「理解」という発想で、ヨーロッパ世界の一大転換期に発生した宗教改革、それがもたらした世界像の根本的変革を分析したのです。

しかし、ヴェーバーの分析は複雑です。ヴェーバー合理化論の両義性（アンビヴァレンス）とでも言えはいいのでしょうか。そこには、非日常的な宗教から日常的な経済への展開という不連続・逆説をとらえるパラドックスな展開と構図が存在します。この論理の飛躍・不連続に、ヴェーバーによる意図的な史料操作があったのではないかという指摘（疑念）すら生まれてきました。しかし、（これは、あくまでも私見なのですが）この誰もが想像だにしないパラドックスにこそ、「意図せざる結果の誕生」というヴェーバー一流の社会科学方法論の提示と醍醐味があるのではないのでしょうか。この点は、つづく茨木・井腰両氏の論考に委ねましょう。

3. 焦点となる人物の言説から

さて、ここで、倫理論文で取り上げられたプロテスタンティズムに関係する主要人物たちの言説を確認しておきたいと思います。

まず、M.ルターですが、ルター訳聖書に出てくるBeruf概念、つまり天職・職業召命観に関してです。圧倒的な影響をもたらした「万人司祭説」、つまり、現世から目を背け、自己の求道生活にのみ関心を抱く利己的な修道士に対して、世俗の職業人こそがキリストの説く隣人愛の実践者であるという現世肯定的な革命的な考え。この考えが宗教改革の大きな起爆剤となりました。しかし、与えられた職業生活の範囲から出でてはならないというその厳格な伝統主義的傾向は、自由な資本主義的利潤追求に馴染むものではありませんでした。

これに突破口を切り拓いたのが、カルヴィニズムだったといえるでしょう。すなわち、1647年の「ウェストミンスター信仰告白」を基礎とする予定説（予定調和説）の提示です。個人の救済というものが既に決定済みであり、どれほど真摯な祈りでもその決定は覆されない。救われるか救われないかは神のみぞ知る。「我を救いたまえ」という祈りの無効化…。いわゆる信仰の脱呪術化（Entzauberung）という第二の革命がスタートします。これは、考えてみれば確かに恐ろしい考えです。決定済みである神の真意をうかがい知ることにはできない。どれほど真摯な信者であっても救われるという保証がないということです。この教えの前で、プロテスタントたちは、何人たりとも逆えられない不安と内面的孤独化に追いやられていきました。それが、近代的な個人の精神的自立への途を切り拓いていったとヴェーバー言うのです。このカルヴィニズムは、確かに一種の文化革命運動とも評価されるべきものでしょう。

かつて、自身プロテスタントであったタルコット・パーソンズは、「道具的活動主義」概念、つまり「神の王国を地上に実現する」という（神の）計画を実現するため、職業人は神の道具たる手足となって活動としたこの概念をたいへん気に入り多方面で使用していました。しかし、この社会的に意義ある（隣人に貢献する）天職への精進のみが神の栄光を増すという考え方は、今日の間人観に照らし合わせると、あまりにも非人間的です。得られるものは救済の自己確証のみという孤独さにプロテスタントたちは耐えていかねばなりません。ここに、近代資本主義の精神ともいえるべき徹底した自律的合理性と自己管理の精神が生み出されてきます。つまり、独自の生活倫理の形成と、近代的秩序に適合した人間類型の誕生ですが、これは有名な世俗内禁欲（die innerweltliche Askese）の考えにつながります。世俗生活は禁欲実践の場である。欲望を律し、職業生活を遂行し成果を生み出すという孤独で自律的な生活倫理。神の「道具」となって、それを実践しうる者のみが救いの対象たる存在であるという自己確証。以上の考え方が、やがて外の権威に寄りすがらない孤独な反權威主義、感覚文化の拒否、合理的規格化、さらには、血縁・地縁を排し、帰属主義から業績主義への転換を軸とする近代官僚制的な効率的組織形成への途を切り拓いていったというわけです。

つぎに、ルターやカルヴァンの解釈を原理とし、それらを実践した人物としてB.フランクリンとR.バクスターをあげておきたいと思います。フ

ランクリンは、庶民の日常生活のテキストとして普及した *Advise to a young tradesman* のなかで、勤勉と信用の勧めといえる職業的労働への献身、すなわち禁欲的エートスを高らかに謳っています。財の追求は被造物の神化であり拒否しなければならない。何よりも尊ぶべきは信用、そして利子返済にまつわる責任であると。また、英国市民革命期のピューリタン、バクスターも富というものの帰結に対する懸念を表明していました。尊ぶべきものは富ではなく、神の計画を実現するための労働である。禁欲的な節約強制による資本形成は、投下資本として再び生産的に利用せねばならない。バクスターの考えに潜むこのあまりにも人間の持つ全面性 (Allseitigkeit) への断念 (Entsagung) 志向。禁欲的エートスを実践した代表的な二人です。

4. 実質合理性から形式合理性へ

以上のような宗教的情熱に支えられた実質合理性ともいべき生活倫理が、やがて予期せざる・意図せざる結果としての近代資本主義の社会経済的秩序を形成していきます。ヴェーバー自身は、その歴史的経緯をどのように見ていたのでしょうか。1920年の改訂版倫理論文には、新たにメソジストのウェズリーに関する言及があります。メソジストですからかなり宗教的信条に厳格な人物なのですが、わざわざ改訂版に付け加えたということから、ヴェーバーは大衆社会化した今日の資本主義と比較して、宗教的情熱にあふれた初期の資本主義に憧れともいべき回顧主義的なスタンスをもっていたのではないかという誤読 (!?) が生じてしまいました。

資本主義の展開は、まず非日常的な宗教から日常的な経済への大転換を経て、さらに初期の宗教的情熱の鎮静化さらには形骸化による形式合理性の世界へと転換していったとヴェーバーは視ました。そこでは、宗教的信条を伴わない時間、節約、勤勉に関するたんなる市民的職業道徳のみを残存させ、さらに富の蓄積は、現世的利益のたんなる追求と生活の安逸志向を帰結したと。この実質合理性から形式合理性への転換を、ヴェーバーは「鉄の檻」(ein stahlhartes Gehäuse) 問題として、やがて精神なき専門人、心情なき享楽人の跋扈する時代の到来という判定につなげていきました。

休むことなく、絶えず予期せざる結果を生み出しつづける社会の歴史的展開を見つめたヴェーバー。そんな彼が、ただ昔はよかったなどと回顧主義に陥るとは到底思えません。さらにつぎの時代の、パラドックスともい

うべき転換を思い描いていたかもしれないのです。

古典の解説は、読みが浅いと解説者の私情がその翼を広げてしまいます。深いけれど狭い解説では、原著者の広大な問題意識が見えなくなってしまう危険性があります。今回のテーマ部会に登壇されたお二人の研究者は、深く、同時に広い視点で倫理論文の再読に臨まれました。その成果をご堪能ください。

なお、茨木論文は大部のため、2回に分けて掲載させていただいたことを申し添えておきます。前半部分は、前倒しで前号（社会学論叢第184号）に掲載済みです。併せてご高覧ください。